Osaka University Knowledge Archive

Title	近代英文学における批評の伝統
Author(s)	山川, 鴻三
Citation	大阪大学, 1968, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29827
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【1】

氏名・(本籍)	山川鴻三（やまかわこうぞう）
学位の種類	文学博士
学位記番号	第 1553 号
学位授与の日付	昭和 43 年 11 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**近代英文学における批評の伝統**
論文審査委員	(主査) 教授 村上 至孝 (副査) 教授 毛利 可信 教授 田中 健二

論文内容の要旨

第一部

第一章　ロマン的批評の伝統

ロマン的批評は，古典的批評が判断を強調するのにたいして，「判断の停止」を唱え，作品を他律的な標準によって外面的に判断するかわりに，それじしんの標準によってそれを同情的に評価する「温情的」批評である。このようなロマン的批評の美にたいする同情，プラトンの美的観照の理念は，ロマン的批評の重んじるプラトンの遊戯の説につながり，さらにこの説はそれがアリストテレスの「三一致」の法則よりも「意味の一致」あるいは「感情の一致」を重んじ，劇詩よりも叙情詩を重んじる態度に通じる。いずれにしても，ロマン的批評は，古典的批評がアリストテレス的であるのにたいして，プラトン的であり，手段よりも目的を重んじるかわりに，目的と手段の合一に「より高次の道徳の原理」を見いだす。

第二章　コウルリッジとペイター

—想像力をめぐって—

ペイターの想像力説が「ここにいまあるもの」に集中する感覚論的な機械論の上に立っているのにたいして，コウルリッジのは，彼がハートレーの影響のもとで立てた最初のものをのぞけば，天かける冥想を是認する観念論的な有機体説の上に立っている。ところが，ペイターは，このような機械論的な想像力説とともに，カント的シェリング的な観念論的想像力説をもっており，この点でコウルリッジと一致する。しかし，彼らの観念論的想像力説は，コウルリッジがよりカント的でもっぱら観念的であるのにたいして，ペイターがよりヘーゲル的で「なかば感覚的で」ある点で，異なる。けっきょく，コウルリッジの想像力説は主としてもっぱら有機体説的で観念論的な想像力説であるのにたいして，ペイターのは，より重要な相において機械論的で，観念論的であるばあいにもたぶんに感覚論

的な，想像力説である。

第三章　コウルリッジとペイター

—絶対主義者と相対主義者—

コウルリッジがシェイクスピアやダンテの天才を「絶対的なもの」としたのにたいして，ペイターはそれらを相対的なものとし，前者が正義を環境によって左右されない絶対的なものとしたのにたいして，後者はそれを事情次第で変化する相対的なものとした。どうように，一が時間を超越する絶対的存在を仮定したのにたいして，他は変化と成長の跡をたどる相対精神を説いた。しかし，彼らはもっとしばしば，過去のなかに自己の投影を見ようとする一種の「観念論者」である点で一致する。この点で彼らは，古典主義者から見ると，ともに相対主義者である。しかし，ペイターはこの点でコウルリッジよりいっそう進んでいる。だから彼らは，ロマン主義者としてのみ，絶対主義者と相対主義者ということができる。

第四章　ペイターとリード

—審美的，倫理的，社会学的批評家—

ペイターとリードは，ともに審美的批評家として内容と形式の合致する「よい芸術」を重んじ，また倫理的批評家としてもっぱら内容に依存する「偉大な芸術」をとうとぶ。もっとも両家の説のあいだには，一方が感覚的であるのにたいして他方が直観的であるという時代的相違はあるけれども。またペイターは社会学的批評家として芸術を「環境」の所産であると考えるが，彼の時代の科学をもってしては芸術がまた天才の所産であるという問題を解くことはできない。これを解くことができるのは，現代の精神分析学を用いるリードである。けっきょく，リードはペイターの説を現代的に発展させた人であるということができる。

第5章　ペイターとリード

—ヒューマニスト的芸術と抽象芸術—

ペイターとリードは，ヒューマニスト的芸術と抽象芸術という二つの対立する芸術の代表的な批評家である。しかし，じっさいには，両家の芸術観はかならずしも対立するわけではない。まず，ヒュームがこれらの二つの芸術観の根底にあるという「ヒューマニズム」と「宗教的態度」について見ると，彼らはギリシア的ヒューマニズムを重んじる点で一致する。また彼らの芸術観についても，ペイターのヒューマニスト的芸術観は非合理的要素を重視する点と「生気」と「表現の力」を主張する点でリードの抽象芸術観を予言する。この意味で，リードはペイターの衣鉢をつぐ者であるということができる。

第六章　リードとコウルリッジ

—想像力と有機的形式をめぐって—

リードとコウルリッジの想像力説と有機的形式説を比較すると，後者が想像力の無意識的活動と意識的活動をともに強調し，芸術の個性的要素と非個性的要素をともに尊重するのにたいして，前者は想像力の無意識的活動のみを主張し，芸術の個性的要素のみを重んじる。前者の説は，後者のそれより，ほかの点で優っているとしても，この点では劣っている。彼はそれを悟ったのであろう。最近では前説をひるがえして後者に同調している。しかし，この彼の転向もじつはただ彼の説が後者の一面

のみを強調する説からその両面を重視する説へと変わったことを意味するにすぎぬ。彼の説はいかなるばあいにも後者の上に立てられているのであり，彼こそは現代におけるもっとも著名な後者の弟子であろう。

第七章　リードの業績

リードは1930年までエリオットやヒュームの古典主義的傾向に同調するが，それ以後はロマン主義的になり，文学，芸術，社会，教育などすべての批評において，コウルリッジの有機体説と絶対主義，ペイターの機械論と相対主義を調和する。彼がこれをなしうるのは，一つにはベルグソン，ホワイトヘッド，サンタヤナなど現代哲学者のおかげであり，また一つには彼の生い立ったヨークシャの農家の環境と彼の出発した Victoria & Albert Museum の経験によるのであるが，それは何よりもワーズワス，キーツ，ソロー，ホイットマンなど本来のロマン派の伝統に帰ることによるのである。いずれにしてもリードの業績は，これらの二つのロマン的批評を一つに統一する点にあるであろう。

第二部

第八章　古典的批評の伝統

—アーノルドとエリオットの関係をめぐって—

アーノルドとエリオットは，前代の古典的批評家ジョンソンにくらべると一そう自由で包擁的である点で，彼から区別される。彼らは古典論，文化論において，現代と過去との歴史的関連性の意識の差から，一方がギリシアとギリシア精神を重んじるのにたいして，他方が中世とキリスト教を重んじるという点で異なるが，好奇心と虚心と自由な心の働きをもって広くヨーロッパ全体を見渡し，古今の最上のものを知り，それを広く普及させようとつとめる点で一致する。彼らが近代英文学において独自の古典批評の伝統を形づくるのは，まさにこの点においてである。

第九章　アーノルドとエリオット

—ロマン派詩人たちをめぐって—

アーノルドとエリオットが共通に論じている四人のロマン派詩人たちを，悪魔派としてのバイロンとシェリー，自然派としてのワーズワスとキーツの二つのグループに分けて考察する。彼らの議論を比較すると，アーノルドがたとえばワーズワスを「内面生活に飛び込んだ」人としたのにたいして，エリオットが彼を「社会的事件に手出しする」人とし，エリオットが，アーノルドとは反対に，彼を「歴史のパタンにおける彼の位置」のゆえに重んじる点で，両者は異なる。しかし，それらは，内容の面からの，とくに観念の面からの倫理的批評である点で一致するのである。

第十章　アーノルドとエリオット

—価値評価の基準をめぐって—

アーノルドは世界文学中最上のものという意味での古典を，その歴史的関連性を無視して基準にしたので，ホメーロス，ダンテ，シェイクスピア，ミルトンをそれに選び，英文学史の新古典主義の創始者としてのドライデンをそれに選ばなかった。これにたいして，エリオットは英文学の歴史的配景のなかでそれを考えたので，（ホメーロスについてはのべていないが）ダンテを偉大な詩人として認めながら，彼が英文学史のそとにあるがゆえに，それに選ばず，シェイクスピアが英文学史の頂点をなすがゆえに，彼をそれに選び，ミルトンがシェイクスピア以後の衰頽期にあるがゆえに，彼をそれ

に選ばず，ドライデンが英国新古典主義の創始者であり，彼の影響が後の英文学を決定したがゆえに，彼をそれに選んだ。彼らのあいだにはたとえこのような相違があるとしても，彼らはともに過去の文学を基準にする古典的批評家である。

第三部

第十一章　科学的批評の伝統

—I. A. リチャーズをめぐって—

リチャーズの批評理論は終始科学的な言葉でのべられており，この意味で彼の批評は科学的といえるかもしれない。しかし，彼の理論は20年代にはアーノルドの古典的批評のそれに，そして30年代以後にはコウルリッジとプラトンのそれに負っており，それらの理論を彼の言葉で書き変えたものにすぎない。してみると，彼の批評を真に科学的ならしめ，彼を真に科学的批評の伝統の創始者たらしめるものは，彼の批評理論にあるよりも，彼の「実践批評」，彼の作品を分析する技術にあるのである。この意味での彼の批評は，古典的批評とロマン的批評に比して，作品全体の価値評価の点で及ばないところがあるとしても，前者に必要な批評的才能や後者に必要な芸術的天分をもたぬ一般の文学研究者にとってはなおその意義を失わぬであろう。

論文の審査結果の要旨

（論文要旨）

本論文は，近代英文学史上の主要な5人の批評家，すなわち，コウルリッジ，ペイター，リード，アーノルド，エリオットを中心として，近代批評に見られる二つの潮流たるロマン的伝統と古典的伝統とを，それぞれ仔細に検討し，最後に，新しい方法を提唱したリチヤーズの心理学的批評の意義を考察したものである。本文611頁を3部11章に分け，第一部（7章，2～346頁），第二部（3章，348～506頁），第三部（1章，508～611頁）を，それぞれロマン的，古典的，心理的批評の解明に当て，巻尾に参考書目（612～634頁）を添えている。

その要旨はおおむね下記の通りである。

ロマン的批評は，作品をそれ自身の標準によって同情的に評価する「温情的」批評である。それは，目的と手段との合致を理想とし，創作活動を一つの遊戯と考える点でプラトンにつながり，「意味の一致」「感情の一致」を尊ぶことから劇詩よりも抒情詩を重んじる。

想像力説に関してコウルリッジは，ハートリイに心酔した初期を除けばカント哲学から多くを学び，特にシエリングに近い観念論的な有機体説の上に立っている。これに対しペイターは，「構成的知性」としての心意を強調する機械論的な見方を採ると同時に，一方で心意に対する魂の役割を認め，ヘーゲル『芸術哲学』に見られるような「半ば感覚的」観念論を土台にしている。コウルリッジは時間を超越する絶対的存在を仮定し，シェイクスピアやダンテの天才を「絶対的なもの」としたのに対し，ペイターは，変化と成長の跡をたどる相対精神を説いて，芸術の天才を相対的なものと考えた。しかしながら，二人とも過去の中に自己の投影を見ようとする一種の「観念論者」であり，究極

的には共にロマン主義者である。

ペイターとリードとはいずれも，審美的批評家として内容と形式の合致する「よい芸術」を重んじ，倫理的批評家としてもっぱら内容に依存する「偉大な芸術」を尊ぶ。また，ペイターは社会学的批評家として芸術が環境の所産であると考えたが，それがまた天才の所産でもあることに関し，リードは現代の精神分析学を利用してペイターの説を補足し発展させた。なお，ペイターとリードとは，それぞれヒューマニズムの芸術と抽象芸術という二つの対立する芸術の代表者と言われているが，いずれも本来はギリシア的ヒューマニズムを重んじる批評家であり，また，ペイターが芸術活動における非合理的要素を特に強調し，作品に現われる「生気」と「表現の力」に主眼を置いている点で，その芸術観はリードのそれを予言している。

コウルリッジは想像力の無意識的活動と意識的活動とを共に強調し，芸術の個性的要素と非個性的要素とを共に尊重した。一方リードは，初めのうち想像力の無意識的活動のみを主張し，芸術の個性的要素のみを重んじていたが，後にはその説を改めた。このことは，リードがコウルリッジ反対から支持に転じたのでなく，批評家として成長してゆくうちに，コウルリッジの一面のみを強調する初めの段階から脱却して，両面とも尊重する立場に発展したことを意味しており，リードは終始コウルリッジの現代における最も熱心な弟子であったと見るべきである。なお，リードは1930年まで古典主義批評を支持していたが，その後ロマン主義批評に転じ，コウルリッジとペイターを調和させようと試みた。その原因としては，ベルグソン，ホワイトヘッド。サンタヤーナなどの哲学，リード自身の生い立った農村の環境，ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館での勤務などが挙げられるが，さらに，ワーヅワス，キーツ，ソロー，ホイットマンなどロマン派の伝統の重要性を再認識したことが最も大きな力であった。

次に，近代英文学における古典的批評の伝統を代表する者はアーノルドとエリオットであるが，この二人は十八世紀の古典主義的批評家ジョンソンよりも一そう自由で視野が広い。アーノルドがギリシア古代とヘレニズムを重視するのに対して，エリオットが中世とキリスト教を讃仰する点は対照的であるが，両者とも求知心と虚心とをもって広くヨーロッパ全体を見渡し，古今の最上のものを知り，それを広く普及させようと努めた。ロマン派詩人に関する彼らの批評を見ると，例えばワーツワスについて，アーノルドは「内面の生に飛びこんだ人」として賞讃し，エリオットは「社会的事件に手出しする人」として非難しているのであるが，どちらの批評も，詩の内容，特に観念の面からの倫理的批評である点で二人は一致している。バイロン，シェリー，キーツに関する両者の批評についても同様である。

また，作品の価値評価の基準として，アーノルドは，歴史的連関性にかかわりなくホメーロス，ダンテ，シェイクスピア，ミルトンを挙げ，エリオットは，英文学の歴史的展望を試みる立場からホメーロスとダンテを除き，ミルトンの代りにドライデンを選んだ。このように具体例では一致しないけれども，二人とも過去のすぐれた文学を評価の基準に採る古典的批評家であることに変りはない。

最後に，心理学批評の提唱者リチャーズを見よう。彼の批評理論は終始科学的な言葉で述べられているが，1920年代はアーノルドに，1930年代以後はコウルリッジとプラトンに負うところが多い。彼の批評を真に科学的ならしめ，彼を真に心理学的批評の伝統の創始者たらしめるものは，彼の批評

理論よりもその実践批評を分析する技術にある。作品全体の価値評価に関して，心理学的批評は古典的，ロマン的いずれの批評にも及ばないが，リチャーズの提示する批評方法は一般の文学研究者に大いに役立つと思われる。

（本論文の評価）

本論文の特長は，第一に，十九世紀初頭から現代に至る英文学批評の流れを，ロマン的と古典的とに大別し，最も代表的な5人の批評家を中心として考察したことにある。今までにこれら批評家のいずれか一人について評論したり，アーノルド，ペイター，エリオットを結んで概説したりした著作はあるが，本論文はさらに広い範囲に亘って体系的に論じている。

第二に，本論文においては各批評家を個々別々に採り上げるのでなく，例えばコウルリッジを論じつつたえずペイターと比較対照するといった風に，それぞれの批評家をつねに他の批評家たちと関連させて相互の異同を明らかにしている。

第三に，それぞれの批評家の作家論や作品論を検討するだけでなく，その批評態度の基盤をなす哲学思想あるいは世界観を併せて考慮に加えている。

なお，本論文を通じて，著者の綿密な考究を示す興味ある記述がところどころに見出される。例えば，ペイターはヘーゲルの想像力説から多く学んでいるけれども，ヘーゲルがただ外界の形象と心のうちの心象とが一致することを説くのみであるのに対し，ペイターは外的形象が心に呼び出す心象が人によって異なることを説いている点を指摘したり（第121頁），「美」が終始古典的な理想であるのにひきかえ「崇高」は元来古典的なものであるにも拘わらずロマン主義的な理想として発展し，ことにバークにおいてロマン主義運動の直接の動因となったことを明らかにしたり（第231頁以下）などである。元来英文学研究者の間で，純粋に文芸批評そのものを研究対象に選ぶ人は極めて少数であるが，さきに挙げた三つの点で本論文は新しい試みでもあり，学界に寄与するところ決して少くない。

しかし，われわれは本論文の欠点に対して眼を覆う者でなく，以下忌憚のない所見を述べたい。夥しい文献を渉猟した著者として博引旁証は避けがたいかもしれないが，引用文をさらに省略整理し，著者自身大胆に，より多く発言すべきだと思われる。古典的批評の伝統に関しては，ドライデン，ポウプ，ジョンソンをまず取り上げた上でアーノルドに入るべきである。ただそのためには数年の歳月を要するから，著者が他日この欠を補なうことを要望したい。次に，著者が極力主観を排して客観的に記述する態度を堅持しようとしたことは理解できるけれども，そのため全体の論調が平板に陥っている。もし一歩進んで，ロマン的，古典的いずれの批評を著者は支持するのか，著者自身は作家や作品の評価においてどの立場を採るのか，ということについて著者自身の考えを論述したならば，本論文をさらに気魂あるものになしえたであろう。（著者がロマン的批評に本論文の半ば以上の紙幅を当てていることや，それについて記述する態度から，著者はロマン的批評により好意的と見受けられる。）なお，プラトンのイデア，英文学におけるナチュラリズム等々，概念規定や訳語について再考を要するものがあり，引用文の訳文にも生硬なもの，不備なものが若干見出された。

以上われわれは本論文の短所を卒直に指摘したが，それらは本項前段に述べた本論文の本質的価値を決して害なうものでなく，近代英文学批評の伝統について，周到精密で且つ明快な考察を遂行した

本論文は高く評価されねばならない。ここにわれわれは本論文が，文学博士の学位を授与するに値するものと認定する次第である。